

『朱子語類』 卷二六・卷二九 訳注（一八）

二松学舎大学宋明資料輪読会里仁篇班

序言

本稿は、『中國哲學』第四十八号（北海道大學中國哲學會、二〇二二年三月刊）に掲載の『朱子語類』卷二六・卷二九 訳注（一七）の続稿である。本訳注（一八）は卷二七里仁篇下「子曰參乎章」を検討し、報告する。訳注（一）の巻頭に記した「序言」「凡例」は、原則として本稿においても踏襲しているので、（一）を参照されたい。

輪読会里仁篇班の参加者は、石原伸一（茨城高等学校・中学校教諭）、小幡敏行（横浜市立大学教授）、久米晋平（秀明大学専任講師）、中根公雄（二松学舎大学非常勤講師）である。

各条の担当者は、卷二七里仁篇下「子曰參乎章」（里15・1～17）が久米晋平である。

『朱子語類』卷第二十七 論語九 里仁篇下

〔里15〕子曰參乎章

子曰、參乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯。參、所金反。唯、上聲。○參乎者、呼曾子之名而告之。貫、通也。唯者、應之速而無疑者也。聖人之心、渾然一理、而泛應曲當、用各不同。曾子於其用處、蓋已隨事精察而力行之、但未知其體之一爾。夫子知其真積力久、將有所得。是以呼而告之。曾子果能默契其指。即應之速而無疑也。子出。門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣。盡己之謂忠、推己之謂恕。而已矣者、竭盡而無餘之詞也。夫子之一理渾然而泛應曲當。譬則天地之至誠無息、而萬物各得其所也。自此之外、固無餘法、而亦無待於推矣。曾子有見於此、而難言之。故借學者盡己推己之目、以著明之。蓋至誠無息者、道之體也。萬殊之所以一本也。萬物各得其所者、道之用也。一本之所以萬殊也。以此觀之、一以貫之之實可見矣。或曰、中心為忠、如心為恕。於義亦通。○程子曰、以己及物仁也。推己及物恕也。違道不遠是也。忠恕一以貫之。忠者天道、恕者人道。忠者無妄、恕者所以行乎忠也。忠者體、恕者用。大本達道也。此與違道不遠異者、動以天爾。又曰、維天之命、於穆不已、忠也。乾道變化、各正性命、恕也。又曰、聖人教人、各因其才。吾道一以貫之、惟曾子為能達此。孔子所以告之也。曾子告門人、曰夫子之道、忠恕而已矣、亦猶夫子之告曾子也。中庸所謂忠恕違道不遠、斯乃下學上達之義。

〔里15·1／二七·一〕

本文

問一以貫之。曰、且要沈潛理會。此是論語中第一章。若看未透、且看後面去、却時時將此章來提省、不要忘却。久當自明

矣。^①
(時學)

校勘

(1) 久當自明矣——楠本本では「久當自明耳」に作る。

訓読

「二以て之を貫く」を問ふ。曰はく、且く沈潜^{しほら}して理會するを要す。^①此れは是れ論語中第一の章なり。若し見て未だ透らざれば、且く後面を看去きて、却て時時此の章を將ち來りて提省し、忘却することを要せざれ。久しくして當に自ら明らかなるべし。(潘時學^②)

口語訳

「二以て之を貫く」を質問した。

答えた、「差し当たって(当該章の内容を)集中して取り組むように。これは『論語』の中でも第一の章なのだから。もし読んで透徹しなければ、差し当たって(当該章より)後の章を読むとしても、常に当該章を思い出して注意し、忘れはならない。そうすればいずれ自然と分かるだろう。」と。(潘時學^②録)

注

(1) 且く沈……を要す―「沈潛」は、『中庸章句』序に「熹自蚤歲、即嘗受讀、而竊疑之。沈潛反復、蓋亦有年。」とある。
(2) 時擧―「潘時擧」は(里6・3)に既出(その注(2))を参照。

〔里15・2／二七・二〕

本文

問一貫。曰、恁地汎看不濟事。須從頭子細、章章理會。夫子三千門人、一旦惟呼曾子一人而告以此、必是他人承當未得。今自家却要便去理會這處、是自處於孔門二千九百九十九人頭上。如何而可。(道夫)

校勘

(1) 須從頭子細―楠本本では「須從頭理會」に作る。

訓読

「一貫」を問ふ。曰はく、恁地に汎く看れば事を濟さず。須らく頭よ従り子細し、章章に理會すべし。夫子三千の門人あるも、一旦惟だ曾子一人のみを呼びて告ぐるに此れを以てす、必ず是れ他人の承當すること未だ得ず。今自家却て便ち去きて這の處を理會せんと要するも、是れ自ら孔門二千九百九十九人の頭上に處るなり。如何にして可ならん、と。(楊道夫^①)

口語訳

「一貫」を質問した。

答えた、「そんな風は大づかみに読むのであれば埒があかない。冒頭から細かに見、はつきりと理解する必要がある。夫子に三千の門人がいて、（孔子が）曾子一人だけを呼んで告げたのだから、きつと別の人は（曾子の境地を）引き受けることはできない。いま、われわれはたやすく曾子の境地を理解しようとしがちだが、（その場合）自らが孔子の門人二千九百九十九人の上にあることになる。どうしてよろしいだろうか、よくない。」と。（楊道夫録）

注

（1）道夫―「楊道夫」は（里6・3）に既出（その注（2）を参照）。

〔里15・3／二七・三〕

本文

一以貫之、猶言以一心應萬事。忠恕是一貫底注脚、一是忠、貫是恕底事。（拱壽^①）

校勘

（1）拱壽―楠本本では「壽仁」に作る。

訓読

「二以て之を貫く」は、猶ほ一心を以て萬事に應ずと言ふがごとし。「忠恕」は是れ一貫の注脚にして、一は是れ忠、貫は是れ恕の事なり。(董拱壽^①)

口語訳

「二以て之を貫く」は、ちょうど心一つで万事に対応すると言うようなものだ。忠恕とは一貫の注脚であって、一は忠であり、貫は恕のことである。(董拱壽録)

注

(1) 拱壽―「董拱壽」は(里6・3)に既出(その注(2)を参照)。

〔里15・4／二七・四〕

本文

一是一心、貫是萬事。看有甚事來、聖人只是這箇心。(從周)

訓讀

一は是れ一心、貫は是れ萬事。甚事有るかを看來れば、聖人は只是^ただ這箇の心なり。(竇從周^①)

口語訳

「二」は一心であり、「貫」は万事である。何かあるのか見なさい。聖人はこの心にほかならないのだ。(賣從周録)

注

(1) 從周—「從周」は賣從周、字は文卿。鎮江(江蘇省)の人。『門人』第三六〇頁、『書院』第一〇一頁、『年放』第一〇一頁、『学案補遺』卷六九を参照。

〔里15・5／二七・五〕

本文

或問一貫。曰、如一條索。曾子都將錢十十數了成百、只是未串耳。若他人則零亂錢一堆、未經數、便把一條索與之、亦無由得串得。(銖)

校勘

(1) 本条は、楠本本「子曰參乎章」にはない。

訓読

或るひと一貫を問ふ。曰はく、一條の索の如し。曾子都て錢を將て十十に數へ了りて百と成す、只是だ未だ串かざるのみ。

他人の若きは則ち零亂の錢一堆、未だ數ふるを經ず、便ち一條の索を把りて之に與ふるも、亦た得て串き得るに由無し。

(董銖)^①

口語訳

ある人が「一貫」を質問した。

答えた、「二筋の繩のようだ。曾子はすべて錢を十枚ずつ數えて百枚とし、まだ(繩で錢を)通していないだけだ。これが他の者の場合は、ひと山の錢があつて、まだ數えてもいないから、一本の繩を与えたとしても、串ざししようがないのだ。」と。(董銖録)

注

(1) 銖―「銖」は、董銖(一一五―一二二四)字は叔重、槃澗先生と称される。饒州德興県(江西省)の人。『門人』第二七六頁、『書院』第九六頁、『年攷』第一〇一頁、『学案補遺』卷六九を参照。

〔里15・6／二七・六〕

本文

問一貫之說。曰、須是要本領是。本領若是^①、事事發出來皆是。本領若不是^②、事事皆不是也。(時舉)

校勘

- (1) 本領若是―楠本本では「本領者是」に作る。
(2) 本領若不是―楠本本では「本領者不是」に作る。

訓詁

一貫の説を問ふ。曰はく、須是すべからく本領の是なるを要すべし。本領若し是なれば、事事發し出で來るは皆是なり。本領若し是ならざれば、事事皆是ならざるなり。(潘時學¹)

口語訳

一貫の説を質問した。

答えた、「本質が正しいことが必要である。もし本質が正しければ、現出する事柄はすべて正しい。本質が正しくなければ、何事もすべて正しくない。」と。(潘時學録)

注

- (1) 時學「潘時學」は(里6・3)に既出(その注(2)を参照)。

〔里15・7／二七・七〕

本文

或問、一以貫之、以萬物得一以生爲說。曰、不是如此。一只是二三四之一。一只是一箇道理。(胡)泳。

校勘

(1) 本条は、楠本本「子曰參乎章」にはない。

訓読

或るひと「一以て之を貫く」を問ふに、萬物一を得て以て生ずを以て説と爲すか、と。曰はく、是れ此くの如くならず。一は只是だ二三四の一のみ。一は只是だ一箇の道理のみ。(胡)泳。

口語訳

ある人が、「一以て之を貫く」を、『老子』にいう「萬物一を得て以て生ず」で説くことを質問した。

答えた、「そうではない。一はただ二三四の一であり、一は一つの道理である。」と。(胡)泳録

注

(1) 或るひ……と爲す。「萬物得一以生」は、『老子』第三十九章に「昔之得一者、天得一以清、地得一以寧、神得一以靈、谷得一以盈、萬物得一以生。侯王得一以爲天下貞。其致之、天無以清將恐裂、地無以寧將恐發、神無以靈將恐歇、谷無以盈將恐竭、萬物無以生將恐滅、侯王無以貴高將恐蹶。故貴以賤爲本、高以下爲基。是以侯王自謂孤、寡、不穀。此非以賤爲本邪。非乎。故致數與無與、

不欲瑋如玉、瑋瑋如石。」とある。

(2) 「胡」泳―「胡泳」は(里6・20)条に既出(その注(4)を参照)。

〔里15・8／二七・八〕

本文

一は忠、貫は恕。(道夫)

訓読

一は是れ忠、貫は是れ恕なり。(楊道夫^①)

口語訳

一は忠であり、貫は恕である。(楊道夫録)

注

(1) 道夫―「楊道夫」は、(里6・3)に既出(その注(2)を参照)。

〔里15・9／二七・九〕

本文

一者、忠也、以貫之者、恕也。體一而用殊。(人傑^①)

校勘

(1) 一―「二者」の上に、楠本は「忠恕一以貫之」の六文字が有る。

訓読

「一」とは、忠なり、「以て之を貫く」とは、恕なり。體一にして用殊^{こと}なる。(人傑^①)

口語訳

「一」とは忠であり、「以て之を貫く」とは恕である。「一」と「以て之を貫く」とは(体としては一つであって用としては異なる。(萬人傑録))

注

(1) 萬人傑―「人傑」は(里4・1)に既出(その注(1)を参照)。

〔里15・10／二七・十〕

本文

忠恕一貫。忠在一上、恕則貫乎萬物之間。只是一箇一、分著便各有一箇一。老者安之、是這箇一、少者懷之、亦是這箇一。朋友信之、亦是這箇一、莫非忠也。恕則自忠而出^①、所以貫之者也。(謨)

校勘

(1) 恕則自忠而出—楠本本では「恕則自中而出」に作る。

訓読

忠恕は一貫なり。忠は一の上^①に在り、恕は則ち萬物の間を貫く。只是だ一箇の一のみにして、分著^{ちやく}すれば便ち各一箇の一有り。「老者は之に安んず」、是れ這箇の一、「少者は之に懷く」、亦た是れ這箇の一、「朋友は之を信ず」、亦た是れ這箇の一、忠に非ざる莫きなり^①。恕は則ち忠よりして出で、之を貫く所以の者なり。(周謨^②)

口語訳

忠恕は一貫である。忠は一の上^①にあり、恕は万物の間を貫いている。一に過ぎず、分ければそれぞれ一がある。(『論語』公治長篇第二十五章の)「老者は之に安んず」はこの一であり、「少者は之に懷く」もこの一であり、「朋友は之を信ず」もこの一であって、いずれも忠でないものはない。恕は忠より出で、貫いているものである。(周謨録)

注

- (1) 老者之……きなり―「老者安之」、「少者懷之」、「朋友信之」は、『論語』公治長篇第二十五章に「顔淵、季路侍。子曰、盍各言爾志。子路曰、願車、馬、衣、輕裘。與朋友共、敝之而無憾。顔淵曰、願無伐善、無施勞。子路曰、願聞子之志。子曰、老者安之、朋友信之、少者懷之。」とある。
- (2) 謨―「周謨」は(里10・2)に既出(その注(1)を参照)。

〔里15・11／二七・十一〕⁽¹⁾

本文

忠是⁽⁵⁾一、恕是貫。忠只是一箇真實⁽²⁾。自家心下道理、直是真實⁽⁴⁾。事事物物接於吾前、便只把這箇真實應副將去。自家若有一毫虛偽、事物之來、要去措置他、便都不實、便都不合道理。若自家真實、事物之來、合小便小、合大便大、合厚便厚、合薄便薄、合輕便輕、合重便重、一一都隨他面分應副將去、無一事一物不當這道理。(賀孫)

校勘

- (1) 本条は、楠本本「子曰參乎章」にはない。
- (2) 真―「真」は和刻本にはない。
- (3) 自家心下道理―和刻本には「貫自家心下道理」に作る。
- (4) 直是真實―和刻本には「真是見得」に作る。
- (5) 毫―正中書局本では「豪」に作る。

訓読

忠は是れ一、恕は是れ貫なり。忠は只是だ一箇の眞實のみ。自家の、心下の道理は、直ちに是れ眞實なり。事事物物 吾が前に接まじはれば、便ち只だ這箇の眞實を把りて應副して將ち去く。自家に若し一毫の虚偽有れば、事物の來るに、他を措置せんと要め去くも、便ち都すべて實ならず、便ち都て道理に合せず。若し自家眞實なれば、事物の來るに、合に小なるべければ便ち小、合に大なるべければ便ち大、合に厚かるべければ便ち厚く、合に薄かるべければ便ち薄く、合に輕かるべければ便ち輕く、合に重かるべければ便ち重く、一一都て他の面分に隨ひて應副して將ち去き、一事一物として這の道理に當たらざる無し。(葉賀孫¹)

口語訳

忠は一であり、恕は貫である。忠は眞實に他ならない。自分の心に存する道理は、そのまま眞實である。事物がわが身に接するときには、この眞實で対処してゆくのである。自分にも少しでも虚偽があれば、事物が到来した時、それを処理しようとしても、すべて不実であり、すべて道理に合致しない。もし自分が眞實であれば、事物が到来した時、小であるべきならば小、大であるべきならば大、厚であるべきならば厚に、薄であるべきならば薄に、輕であるべきならば輕に、重であるべきならば重に、いちいちそれらの情實に従って対処してゆき、どの事物もこの道理にあたらぬものはない。

(葉賀孫録)

注

(1) 賀孫―「葉賀孫」は(里1・3)条に既出(その注(4)を参照)。

〔里15・12／二七・十二〕

本文

道夫竊謂⁽¹⁾、夫子之道如太極、天下之事如物之有萬。物雖有萬、而所謂太極者則一、太極雖一、而所謂物之萬者未嘗虧也。至於曾子以忠恕形容一貫之妙、亦如今人以性命言太極也。不知是否。曰、太極便是一、到得生兩儀時、這太極便在兩儀中、生四象時、這太極便在四象中、生八卦時、這太極便在八卦中。(道夫)

校勘

(1) 道夫竊謂―「竊謂」の上に、楠本本は「因讀吾道一以貫之」の八文字が有る。

訓読

道夫竊かに謂へらく、夫子の道は太極の如く、天下の事は物の萬有るが如し。物に萬有りと雖も、而るに所謂太極なる者は則ち一、太極は一なりと雖も、而るに所謂物の萬なる者は未だ嘗て虧けざるなり。曾子に至りて忠恕を以て一貫の妙に形容するも、亦た今人の性命を以て太極を言ふが如きなり。知らず是なるか否なるかを。曰はく、太極は便ち是れ一、兩儀を生ずる時に到り得て、這の太極は便ち兩儀の中に在り、四象を生ずる時、這の太極は便ち四象の中に在り、八卦を

生ずる時、この太極は便ち八卦の中に在り、と。^①（楊道夫^②）

口語訳

（私）道夫が思いますに、孔夫子の道は太極のようであり、天下の事は物が無数にあるようなものです。物が無数にあるとしても、所謂太極なる者は一ですし、太極は一だとしても、所謂物が無数にあるのはこれまでに欠けたことがありません。曾子に至って忠恕で一貫の精緻な本質をたとえたのは、今人が性命で太極を説くようなものです。（以上の見解は正しいのでしょうか。」と。

朱子が答えた、「太極はまさに一であり、両儀（陰と陽）を生じる時、この太極は両儀の中に存在し、四象（金、木、水、火）を生じる時、この太極は四象の中に存在し、八卦（乾（☰）、兌（☱）、離（☲）、震（☳）、巽（☴）、坎（☵）、艮（☶）、坤（☷））を生じる時、この太極は八卦の中に存在するということになる」と。（楊道夫録）

注

（1）太極は…あり、と―「太極便是一、到得生兩儀時、這太極便在兩儀中、生四象時、這太極便在四象中、生八卦時、這太極便在八卦中」は、周敦頤「太極図説」の「太極動而生陽、動極而靜、靜而生陰、靜極復動。一動一靜、互為其根。分陰分陽、兩儀立焉」に対する朱子の注に「太極之有動靜、是天命之流行也。所謂一陰一陽之謂道。誠者、聖人之本、物之終始、而命之道也。其動也、誠之通也、繼之者善、万物之所資以始也。其靜也、誠之復也、成之者性、万物各正其性命也。動極而靜、靜極復動、一動一靜、互為其根、命之所以流行而不已也。動而生陽、靜而生陰、分陰分陽、兩儀立焉、分之所以一定而不移也。」（以上、「太極図説解」とある。

（2）道夫―「楊道夫」は、（里6・3）に既出（その注（2）を参照）。

本文

忠恕而已矣、不是正忠恕、只是借忠恕字貼出一貫底道理。人多説人己物我、都是不曾理會。聖人又幾會須以己度人。自然厚薄輕重、無不適當。忠恕違道不遠、乃是正名、正位。(閔祖)

訓讀

「忠恕のみ」は、是れ正に忠恕ならず、只是だ忠恕の字を借りて一貫の道理を貼出するのみ。人多く人己物我を説くも、都て是れ曾て理會せず。聖人又た幾に曾て己を以て人を度るを須みんや。自然に厚薄輕重、適當せざる無し。「忠恕道を違へること遠からず」^①は、乃ち是れ正名、正位なり。(李閔祖)^②

口語訳

「忠恕のみ」は、まさしく忠恕なのではなく、忠恕の字を借用して一貫の道理を掲げただけなのだ。人はよく他者と自己と、自己と外界とをいうが、すべてわかったことがない。聖人はさらにどうして自己で他者を推し量る必要があるのか。おのずから厚薄輕重は、例外なく適切なのである。「忠恕道を違へること遠からず」^①は、(忠恕の)正しい名であり、正しい位である。(李閔祖録)

注

- (1) 忠恕道……からず―「忠恕違道不遠」は、『中庸』に「忠恕違道不遠、施諸己而不願、亦勿施於人。」とある。
(2) 閔祖―「李閔祖」は(里12・2)に既出(その注(1)を参照)。

〔里15・14／二七・十四〕

本文

問忠恕而已矣。曰、此只是借學者之事言之。若論此正底名字、使不得這忠恕字。又云、忠字在聖人是誠、恕字在聖人是仁。但說誠與仁、則說開了。惟忠恕二字相粘、相連續、少一箇不得。⁽¹⁾(熹)

校勘

- (1) 本条は、楠本本「子曰參乎章」にはない。

訓読

「忠恕のみ」を問ふ。曰はく、此れは只是だ學ぶ者の事を借りて之を言ふのみ。若し此の正なるの名字を論ずれば、この忠恕の字を使ひ得ず、と。又た云ふ、忠の字は聖人に在りては是れ誠、恕の字は聖人に在りては是れ仁なり。但だ誠と仁とを説けば、則ち説き開き了る。惟ふに忠恕の二字は相ひ粘し、相ひ連續すれば、一箇を少き得ず。⁽¹⁾(呂熹)

口語訳

「忠恕のみ」を質問した。

答えた、「これは学ぶ者にこと寄せて言っただけだ。もし一貫の正しき名称を論ずるとすれば、忠恕の字は使えない。」と。

さらに言った、「忠の字は聖人にあつては誠であり、恕の字は聖人にあつては仁である。ただ誠と仁とを説けば、説き明かせるのだ。思うに、忠恕の二字は互にくつついており、互いに連続しているので、どちらか一文字すら欠くことはできない。」と。(呂叢録)

注

(1) 叢―「呂叢」は(里2・1)条に既出(その注(4)を参照)。

〔里15・15／二七・十五〕^①

本文

盡己爲忠、推己爲恕。忠恕本是學者事、曾子特借來形容夫子一貫道理。今且粗解之、忠便是一、恕便是貫。有這忠了、便做出許多恕來。聖人極誠無妄、便是忠。問、聖人之忠即是誠否。曰、是。聖人之恕即是仁否。曰、是。問、在學者言之、則忠近誠、恕近仁。曰、如此、則己理會得好了。若中庸所說、便正是學者忠恕、道不遠人者是也。忠恕違道不遠、施諸己而不顧、亦勿施於人、只是取諸己而已。問、明道以天地變化、草木蕃、爲充擴得去底氣象、此是借天地之恕以形容聖人之

恕否。曰、是。維天之命、於穆不已。一元之氣流行不息處、便是忠。(淳)

校勘

(一) 本条は、楠本本「子曰參乎章」にはない。

訓読

己を盡くすを忠と爲し、己を推すを恕と爲す。忠恕は本と是れ學ぶ者の事なるも、曾子特だ借り來りて夫子一貫の道理を形容す。今且く粗く之を解すれば、忠は便ち是れ一、恕は便ち是れ貫。這の忠有り了れば、便ち許多の恕を做し出し來る。聖人は極誠無妄、便ち是れ忠。問ふ、聖人の忠は即ち是れ誠なるや否やと。曰はく、是なり、と。聖人の恕は即ち是れ仁なるや否やと。曰はく、是なり、と。問ふ、學ぶ者に在りて之を言へば、則ち忠は誠に近く、恕は仁に近きや、と。曰はく、此くの如ければ、則ち己に理會し得て好し。中庸の説く所の若きは、便ち正に是れ學ぶ者の忠恕にして、「道は人を遠からざる」者これ是なり。「忠恕道に違へること遠からず、諸を己に施して願はざれば、亦た人に施す勿れ」は、只だ是れ諸を己に取るのみ、と。問ふ、明道天地變化して、草木蕃しげるを以て、充擴し得て去くの氣象を爲す、此れは是れ天地の恕を借りて以て聖人の恕を形容するや否やと。曰はく、是せなり。維れ天之命、於穆あまとして已まず。一元の氣流行して息まざる處、便ち是れ忠なり、と。(陳淳¹)

口語訳

「己を尽くすを忠と為し、己を推すを恕と為す」。忠恕とはもともと学ぶ者の事柄であつたが、曾子はただ忠恕を借用して孔夫子一貫の道理を見たに過ぎない。今、ひとまず大雑把に解釈すれば、忠とは一であり、恕とは貫である。この忠が有つてこそ、多くの恕が現れるのだ。聖人は極めて誠であり無妄、つまり忠なのである。」と。

質問した、「聖人の忠はとりもなおさず誠なのでしょうか。」と。

答えた、「そうだ。」と。

(質問した)「聖人の恕はとりもなおさず仁なのでしょうか。」と。

答えた、「そうだ。」と。

質問した、「学ぶ者にあつて言えば、忠は誠に近く、恕は仁に近いのでしょうか。」と。

答えた、「そうであれば、しっかりと理解していよう。『中庸』にて説くものは、まさしく学ぶ者の忠恕であり、「道は人を遠からざる」ものである。「忠恕道に違へること遠からず、諸を己に施して願はざれば、亦た人に施す勿れ」は、忠恕を己にあつて求めることに他ならない。」と。

質問した、「程明道は「天地変化して、草木蕃る」によつて、(天地万物が)拡充してゆく現象としました。これは天地の恕を借用して聖人の恕を表現したのでしょうか。」と。

答えた、「そうだ。「維れ天の命、於穆として已まず」。一元の気が流行し続けるさま、これが忠なのだ。」と。(陳淳録)

注

(1) 淳―「陳淳」は(里1・2)に既出(その注(3)を参照)。

本文

主於内爲忠、見於外爲恕。忠は無一毫自欺處、恕是稱物平施處。(徳明)

訓読

内を主^{つかさど}るを忠と爲し、外に見^{あらは}るるを恕と爲す。忠は是れ一毫すら自ら欺く處無く、恕は是れ物を稱^{ほか}り施しを平らかにする處なり。(廖徳明)⁽¹⁾⁽²⁾

口語訳

内面を統率するのが忠であり、外面に現れるのが恕である。忠とはごくわずかにも自分自身を欺くことがなく、恕とは「ほどほどをはかり考えて施しを公平にする」ことである。(廖徳明録)

注

(1) 恕は是……處なり―「稱物平施」『易』謙の「象傳」に「象曰、地中有山。謙 君子以裒多益寡、稱物平施。」とある。

(2) 徳明―「徳明」は、廖徳明(乾道五年(一一六九)進士)字は子晦、号は槎溪。南劔川順昌県(江西省)の人。『門人』第二八七頁、『書院』第五六頁、『年攷』第一〇一頁、『学案補遺』巻六九を参照。

〔里15・17／二七・十七〕

本文

忠因怨見、怨由忠出。(閔祖)

訓読

忠は怨に因りて見^{あらは}れ、怨は忠に由りて出づ。(李閔祖^①)

口語訳

忠は怨にもどづいて出現し、怨は忠によって出現する。(李閔祖録)

注

(1) 閔祖「李閔祖」は(里12・2)に既出(その注(1)を参照)。